洗面台の鏡の前に立って、ブタの女王のことを漠然と考えていた。気高く美しい、美しいというのはあれね、ブタの概念ね、女王ブタの奥田環とは、わたしのことである。今日も大学へリムジンでご通学。リムジンというのは、わたしの愛ママチャリ、環ビュンビュン号のことである。こぐと必要以上にギシギシときしみ、いまにもパンクしそうなタイヤ。わたしは、そのスリルがなんともたまらない。それに、自転車に乗ると処女膜が破れやすくなるって聞いたこともあるし、ダイエットにもなるし、一石二鳥でもある。そう、なにを隠そうわたしは処女なのである。ご開帳を待つ清き乙女。わたしのヴァージンを捧げるのは直人、そう決めている。

しかしである。わたし、自分のことを「ブタの女王」だなんて呼んで、うかれている場合じゃないんじゃないか。わかっている、本当はわかっている。しかし、この二十年の屈辱を耐え忍ぶには、こうした開き直りが必要不可欠だったのだ。人間としての誇りを見失わずに生きていくすべ。ただそれだけのことだ。なにもわたしは本当に自分のことをブタだなどと思っているわけではない。それほど馬鹿じゃありゃしない。我輩はブタである、なんて本気で思っているやつがいたら、いいお笑い種だ。お笑い種どころか、それこそブタ箱行きだろう。

そんなことを考えながら玄関を出ると、同じタイミングで向かいの家の玄関から出てきた直人と鉢合わせた。

「おう、タマキン」

直人がほほえんだ。朝日のようなすがすがしい笑顔である。そんなすがすがしい顔で、タマキン、なんて言わないで。

「お、おはよう。今日は早いじゃないの」

「ちょっとな。駅までいっしょに行くか？」

わたしは、照れ笑いを押し殺して、うん、とうなずいた。そして、緊張しすぎてブヒッなんて言わないように、自分を落ち着かせた。というのも、小学校のころ、クラスの男の子たちに、「おい、ブタ、ブヒって言ってみろ！」と何度もブヒブヒ言わされたおぞましい過去があるからだ。しかも、わたしは、その癖がいまでも残り、つい追い詰められると無意識にブヒッと言ってしまうことがときたまあった。

がしかし。ちょっとなってどういうこと？　とっさに浮かんだ不吉な予感に、わたしは目をひん剥いた。

「もしかして…彼女でもできたの？」

恐る恐る聞くと、直人は、顔をニヤつかせて、ふふーん、と鼻を鳴らした。

「か、彼女できたんだ、よかったじゃない」

サンキュー。直人は、さらに軽快に自転車をこいだ。

「わたし、友達と待ち合わせてるからちょっと寄ってくわ」

「おう、じゃあ先行くな。またな、タマキン」

喫茶店の前で急ブレーキをかけた私に、直人がタマキンなどと大きな声で叫んだものだから、周りの人たちがいっせいにわたしのほうを見た。わたしは、恥ずかしさに顔を赤らめながら、ものすごい勢いでペダルをこいでいま来た道を引き返した。

直人に彼女ができたんだ。涙がでてきた。直人が見知らぬ女と楽しそうに歩いている姿を想像してとても悲しくなった。しかし、いままで彼女を作らなかったことのほうが、不思議といえば

不思議だ。スポーツもできるし、容姿だって悪くない。まあ頭のできはよくはないけれど、何人もの女の子が彼に告白してふられたことだって知っている。でも、なぜ直人が彼女を作らなかったのかは聞いたことがなかった。もしかしたらわたしのことを待っていてくれているのかも知れない、とかすかな希望を抱いていただけに、わたしは、打ちのめされた。

ノックアウト。そりゃそうだわ、ブタの金玉と直人じゃあまりに釣り合わないものね。住む世界が違ったのよ。そうよ、そうよ。しょせんわたしは家畜よ。フラれて当然だ。

「ブヒ…ブヒ」

小さな声で言ってみた。

「ブ、ブ、ブヒーッ！」

わたしは、ためらいながらも力をふりしぼっていなないた。そうだ、わたしは、「ブタ」なのだ。

直人のことばかり考えながら茫然自失で大学に到着したが、すでに一限目の授業ははじまっている時間だった。わたしが遅れて教室に入ると、教授が、
「奥田君、遅いじゃないか」
と言ったものだからみんなが一斉にこちらに振り向いた。
「ブヒッ、す、すみません」
頭が真っ白になりついブタの鳴き声で答えてしまったわたしに、みんなが注目しているのがわかった。空席の一番前列の席に座るために小走りで後ろから急ぐと、さっと椅子に腰を降ろした。勢いよく座りすぎて椅子がミシッと音を立て、とたんに教室のあちらこちらから、クスクスという笑い声が聞こえてきた。
けれど、そんなことはどうでもいいと言わんばかりに、わたしは、授業も上の空で直人のことを考えていた。小学校のとき、ブタブタとクラスの男子から罵られていたわたしを助けてくれたのが直人だった。
「お前らやめろよ、こいつはブタじゃねえぞ。タマキンって名前があんだからな」
一瞬の沈黙の後、どわっと笑いが起こった。直人は、自分が言ったことのなにが可笑しいのかさっぱりわからないといった様子できょろきょろと辺りを見回し、わたしのほうを困惑した顔でみやった。その直人の顔を見たとき、わたしの目から涙があふれた。わたしは、うれしかった。直人がかばってくれたことがなによりうれしかった。キンタマだろうが、キャンタマだろうが、タマキンだろうがなんでもよかった。
直人は、泣いているわたしの手を引いて教室を出た。
「泣くなよ、タマキン」
わたしが鼻水をすすりながら、ありがとう、と言うと、
「おまえは俺のお向かいさんだから」
とぶっきらぼうに答えた。
直人を意識しはじめたのはそのときからだった。わたしは、直人がいるだけでブタであろうがなんであろうが我慢できる気がしていた。けれど、スポーツ万能でクラスの女子たちの人気者だった直人がわたしをかばったことで、わたしは、女子までも敵に回してしまったのだ。
ある日、クラスで一番かわいい千夏を中心としたグループに、帰り道に呼び止められた。そして、神社の境内まで言われるがままに彼女たちの後をついていった。
「あんた、直人君とどういう関係？」
千夏の一番の信奉者である智子がわたしに言った。
「お向かいさん…だけど」
直人も言っていたように、わたしたちは、お向かいさんなのだ。
「それだけ？」
「それだけだよ」
「じゃあ、なんで直人君があんたなんかのこと助けるのよ」
「だってお向かいさんだからって」
すると、うしろから様子を見守っていた千夏がわたしのほうにつかつかと歩いてきたかと思うと、わたしの頬をぶった。

「なにがお向かいさんよ！　直人君にちょっかいださないでよね！」
　そして、取り巻きの子たちも、
「そうよそうよ、千夏ちゃんはずっと前から直人君のこと好きだったんだからね」
「あんたなんかブスだから直人君とはお似合いじゃないわよ」
「ブタのくせに人間を好きにならないでよ」
　と口々に叫んだ。
　わたしは、わけがわからなくなりその場にしゃがみこんで頭を抱えて泣いた。すると、千夏がランドセルに差していたリコーダーを抜いて、わたしの頭をゴチンと殴った。それを合図にみんながわたしに暴力をふるった。わたしは、されるがままに倒されて、泥まみれになりながら、直人の名を心の中で呼びつづけた。
「ばーか」
「でーぶ」
「ぶーす」
「ぶーた」
　そして、各々が言いたいことを最後にひとことずつ残して立ち去った。直人は、とうとう来なかった。
　そんな過去に思いを馳せているうちに、いつのまにか授業は終わっていた。直人のことは考えないようにしよう。どうせあきらめた恋。いまさらなにをくよくよしてるのかと、自分を叱責してみたり。
「奥田さん」
　振り向くと、クラスメイトの高柳さんが笑顔で立っているではないか。
「奥田さんって、今日の夜時間あるかな？」
「あるけど、どうかした？」
　高柳さんは、へへっといたずらっぽく笑って、
「今日ねえ、合コンがあるの」
　と声をひそめた。
　合コン？　わたしが？　頭の中をはてなマークがぐるぐると回った。デブで、ブスで、根暗で、ダサいわたしなんかが合コン？　合コンって若い男と女がお酒を飲んで、王様ゲームやったり、乳繰り合ったりするパーティのことだよね？
「合コンってあれだよね、合同コンパのことでしょ？」
「ぷっ、なにそれぇ、合同コンパなんていまどき言わないよぉ」
　高柳さんは、おなかを抱えて肩をゆすって笑っていた。
「わたしなんかが行ってもいいの？」
　不安になってそう聞くと、
「いいわよ、いいから誘ってるんじゃないの。実はさ、今日急に行けないって子ができちゃってさ、代わりにどうかなって思ったの」
　何か裏がある。わたしは、そんな気がした。だって、わたしごときが合コンに誘われるわけな

いもの。今までの経験からいって何かしら裏がある。
「ねぇ、だめ？」
　甘ったるい声で高柳さんがわたしの顔を覗き込む。わたしは、警戒心いっぱいに高柳さんの目の奥を読みとろうとした。はっ。いや、待てよ、これは直人のことを本気で忘れるチャンスかも知れない。そう思いついた瞬間、
「オッケ。わかったわ。ぜひ参加させていただくわ」
　と唐突に親指を立てて突き出した。高柳さんは、その勢いにびっくりしたようにのけぞった。
「じ、じゃあ正門の前で五時半ね。遅れるときは連絡して」
　と言って、高柳めぐみとかわいらしい字で書いた、連絡先を記した名刺をわたしに渡して去っていった。
　そのとき、わたしは気がついた。わたしったら、携帯電話すら持ってないじゃない！　慌ててノートと筆記用具をかばんにしまって席を立ち、電気屋を目指して大学を後にした。

「もしもし」
　ママの声が聞こえた。
「もしもし、わたし」
「あら、環ちゃん？　どうしたの？」
「わたし、いまどこから電話してると思う？」
「学校の公衆電話でしょ？」
「ぶっぶー。残念でした。なにを隠そう、携帯電話を買ってしまったのですぅ」
　ほら、ママもびっくりするぞぉ。わたしが携帯電話持ったのよ。
「で、どうしたの？　なんの用？」
「で？　ってなによそれ、びっくりしないの？」
「どうしてびっくりするのよ、そんなのいまどき当たり前でしょ」
「あっそ。じゃもうひとつびっくりさせちゃおうかな？」
「なによ？」
「なんだと思う？」
「知らないわよ、言わないなら電話切るよ」
「あーあー、待って待って、今日ねえ、わたし、合コンに行くの！」
　一瞬、沈黙がふたりを包んだ。わたしは、携帯電話を握る手にいやな汗をかいた。この沈黙の後におとずれるのは、生か、死か。
「合同コンパ？」
　震える声でママが言った。
「そう、合同コンパ」
　わたしも声が震えた。
「あ、ああ、あんた、セックスするときはコンドームつけなさいよ。コンドーム。ってあああああ、わたしったらなにを言ってるのかしら。た、環ちゃん、ねえ、おほほほほ」
「ママ、落ち着いて。乱交パーティじゃないんだから」
「乱交パーティ？　環ちゃん、あなたそんな言葉どこで覚えてきたの？　ママは許しませんよ」
「だからぁ、合コン。ただの飲み会よ。ただ交際相手を見つけることを目的とした飲み会だけどね。えへへへ」
「気をつけなさいよ。世の中には物好きがいるからね。あなたも安心できないわよ。パパには、内緒にしといてあげるから」
「心配してくれてありがと。気をつけるね」
　電話を切った。ママはわたしのことを心配してくれているんだ。そうよね、世の中には物好きがいるもんね。ん？　それって娘に対して言う言葉かしら？　わたしは、腑に落ちないながらも、娘を思う母の気持ちをありがたく思った。
　さてと、メールアドレスを決めなければ。まずは腹ごしらえ。
「ビッグマックセットのポテトで、コーラ。あと、マックナゲットにアップルパイ」
　注文した品を受け取り禁煙席に座ると、思いつくメールアドレスを紙ナプキンに書いてみた。「beauty-tamaki」おこがましいか。「miss-yokohama-tamaki」さらにおこがましい。「pig-

tamaki」自分からいう必要もないか。「bu-bu-tamaki」笑えない。「debu-tamaki」自虐的過ぎる……。
「tamakin0303」よしっ！　これでいこう。三月三日はわたしの誕生日だし。タマキン０３０３。きまった！
　アップルパイを平らげてコーラを飲み干し時計を見ると、もう三時半を回っていた。わたしは、高柳さんを真似て作った名刺を大事にかばんにしまってマクドナルドから出た。
　待ち合わせ場所に着いたのは、五時半ぴったりだった。そこにはまだそれらしき人たちは誰もおらず、わたしは、そわそわしていてもたってもいられずに、ついブヒッと小さく言ってしまった。ブヒッブヒッ。
「奥田さん？」
　高柳さんが不振そうな表情を浮かべて現れた。
「いまブヒッブヒッって言ってなかった？」
「うっ。言ってないわよ。言うわけないじゃないの」
「そ、そうよね、言うわけないわよね、ブタじゃあるまいし」
　いいえ、悲しいかな、わたしは「ブタ」なの。そう思ったが、言葉にはしなかった。キチガイ扱いされるのだけは、ごめんである。
「あら、お洋服変えてきたの？」
　そうなのだ、マクドナルドを出たあと、わたしは本屋に立ちより、最近の流行の服をチェックして薄いピンクのワンピースを買って着替えていたのだった。
「素敵ね、今年はピンクが流行りだものね」
　高柳さんは顔を引きつらせているように見えたけれど、深読みするのはやめておいた。
「ほかの人たちは？」
「元町で待ち合わせてあるの」
「合コンは元町なの？」
「そうよ、どうして？」
「そんなお洒落な街になんてあまり行かないもん。気おくれしちゃうな」
「そうなの？　いつもどこでお買い物するの？」
「金沢文庫の駅前のスーパーか商店街かな？」
「そ、そっか、安いしいいもの売ってるのよね、たまに」
「そうなの！　この前なんてね、Ｔシャツが三枚で２９８０円だったのよ。今日着てたやつもそのひとつなんだけどさ、覚えてるかな」
　高柳さんは、しばらく考えて、
「ああ、あの趣味の悪い…」
　と言いかけて口を押さえた。わたしは、あえて聞かなかったことにした。わたしの得意技のひとつである。見ざる言わざる聞かざる。傷つかないために自然と身につけた悲しい術。でも、ブタなのにサルなんておっかしいのー。
　そもそもお嬢様女子大になんか入学したのが間違いであったと思う。男子がいるとまたいじめ

られるんじゃないかという理由で女子大を選んではみたけれど、結局は畑違いであった。わたしには、酪農大学かなんかのほうがあってたんじゃないかしら。おうちでチワワやペルシャ猫を飼っているような部類の人種ではなく、ブタやウシに囲まれて糞まみれになって働くことを幸せと感じる部類の人種が集まる場所。それがわたしにとっての聖地ではなかったのか。悔やんでも悔やみきれない。しかし、「ブタ」は後悔しないのだ。なんせ家畜である。

なんてことを考えているうちに、待ち合わせ場所のルイヴィトンのお店に到着した。高柳さんは、その金の扉をとっても自然に、いとも簡単に開けた。けれど、わたしは、どうしても中に入る勇気がないので、外で待ってるからと告げて、お店の豪奢な雰囲気に溶け込んでいく高柳さんを見つめていた。わたしを拒むように扉がすぅっと閉まった。なっ、やだ…。わたしは、そこに映った自分の姿を見て愕然とした。

「ブタそのものじゃないの…」

自分の姿を見て本物のブタを連想したのは生まれて初めてだった。みんなにブタブタと言われるから、わたしはしょせんブタなのだと考えるようにしていただけなのに。わたしは、ひざから崩れそうになった。新しく買ったワンピースのその薄桃色は、まるでブタの皮膚そのもののだった。

「やっちゃったぁ。ブヒッ」

いけない、またブヒッなんて言っちゃってる。今日はお嬢様のつどいなんだからね、環。わたしも今日はお嬢様。ブタの女王なんかじゃないわ。

男の子たちとはお店で待ち合わせているということで、わたし、高柳さん、富岡さん、北村さんの四人でイタリアンレストラン「フェリチタ」に向かった。

レストランに着くと、男の子たちはもうそろって席についていて、四人が四人ともさわやかな笑顔を…。と思いきや、ひとりだけ場違いなイノシシのような男がいるではないか。わたしは、動物的な勘で、そいつがわたしにあてがわれるのだと悟った。

「お待たせ」

高柳さんが微笑んだ。

四人の中でも一番さわやかな男が、さあ座って、と立ち上がった。高柳さんたちは、目で合図をして席に着いたが、わたしは、もじもじとするばかりで席につくことすらままならなかった。

「どうしたの、どうぞ」

と男がわたしにイノシシの前の席を案内した。ほら来た！　わたしの予想は的中していたのだと思った。

「じゃあ乾杯しようか」

という男の掛け声で、みんながシャンパンの注がれたグラスを持った。

「チアーズ」

はっ。みんな、チアーなんとかって言ったわよね？　乾杯じゃないの？　わたしは戸惑ってしまい、かんぱーいと言おうと思ったのだが、声が裏返って、

「かんぱははぁぁい」

みたいなことになってしまって、みんな失笑。

そのなかで唯一イノシシだけが同じようにかんぱーいと声をかけて、

「おまえら、そのチアーなんとかってなんだよ？　なあ」
　と楽しそうに騒ぎ立てた。
「それあれじゃねえの？　オイーッス！　オイーッス！　いかりや長介オイーッス」
　イノシシは、三回オイーッスと叫び、ガハガハと下卑た笑い声を上げた。そして、そんなイノシシに、高柳さんたちは目を合わせて眉をひそめあっていた。
「ほ、ほら、自己紹介しましょうか？」
　高柳さんの一声でみんなが気持ちを建て直し、めいめいが自己紹介をした。相手の男の子たちは、慶応大学に通うの同級生だという。そして、イノシシの猪俣一郎という名前があまりにもぴったりだと思いつき、笑ったとたん鼻が鳴った。フンゴォ。そして、結局今日も最後にはわたしが恥をかくという、いつものパターン。
「わたしはブタだからしょうがない」
　心の中でそれを五回繰り返し唱えて、やっと平常心にもどれたときには、みんな夏休みにでかける旅行の話で盛り上がっていた。わたしは、修学旅行で東は仙台、西は京都より向こうに行ったことがなかったので、海外旅行の話なんかわかるはずもない。時間を持てあまし、自分のプレートは平らげ、女の子たちが料理のプレートにも手をつけずにお話に夢中になっているのを不思議に思い、お皿と顔とを交互に見ていた。
「奥田さん、まだ足りないの？」
　そんなわたしに気がついた北村さんがそう言ったものだから、みんながこれも食べていいよ、とわたしの前にお皿を並べた。そんな場面を目の前にした男たちが蔑んだ笑いを浮かべてそのやりとりを眺めている。見せ物じゃないのよ。わたしは、恥ずかしいやらくやしいやら、でも本当は料理がもらえてうれしいやらで困惑した表情のままそれらの料理を食べた。食べるしかなかった。
「おい」
　声の主は、イノシシだった。
「俺も食べていいか？」
　わたしは、無言で首を縦にふった。
「うめぇな」
　イノシシが無邪気にそう言うので、わたしもなんだか愉快な気分になって、
「うぅ」
　とほほえんだ。
「お前、誰かの代わりか？」
　イノシシが声をひそめた。
「そうなの」
「俺もだ」
　わたしたちは、お互いに笑いあった。同じ臭いがして気楽に話せる相手だと思った。そして、楽しく語らう高柳さんたちをわき目に、
「さあ、じゃあ皆さん、そろそろ移動しましょうか」
　と気取った態度が鼻につく金子という男がその場をしめるまで、わたしとイノシシは、ついに

出された料理を平らげることだけに神経を傾けた。
「どちらに行かれるのかしら？」
「近くに落ち着いたワインバーがあるんですよ。うちの父の会社の取引先のお店なんですけどね」
「まあ素敵。ねえ、じゃあそちらにごいっしょしない？　ねえ？」
　高柳たちは、盛り上がって連れ立ってお手洗いに化粧を直しに行った。その間に金子は、店員を呼び会計を済ませ、
「ごめんね、今日は女の子はひとり一万円なんだ。女の子からもらうのは心苦しいけど。ほかの子たちにはあとでもらうからさ」
　とわたしに言った。
　わたしは、高いと思いつつも言われたとおり一万円を支払った。しかし、どう考えてもほかの女の子たちからお金を集めるとは思えなかった。わたしのぶんは払う価値がないというわけ？
　ちょっぴり頭にきたが、まぁしょうがねえわな、わたしゃブタだよ、ブタ、と言いきかせて自分をなだめた。そして、笑顔を無理やり浮かべて作ってきた手書きの名刺を男の子たちに渡した。彼らは、戸惑いながらもありがとうと受け取り、ポケットの中へしまった。
「俺たち、タクシーつかまえてくるから」
　金子がそう言いイノシシになにかを耳打ちすると、イノシシひとりを残して男たちは席を立った。わたしとイノシシは、とくになにをしゃべるわけでもなくぼぉっと座ったままみんなの帰りを待った。
「遅いわね」
　わたしが言うと、
「みんな帰ってこないぜ」
　と鼻くそをほじった。
「なんでわかんのよ？」
「おまえのことよろしくって金子に言われた」
　そういうことか。ブタとイノシシ。お似合いじゃないか。生まれてくる子供はイノブタだって？　そうさ、イノシシを家畜として飼いならしたのがブタだってあんた知ってんの？
「ブヒッ」
「なんだよ、そのブヒッって？　それじゃ本物のブタだぜ。がははは」
　デリカシーのないやつだ。
「あんたもイノシシみたいだわよ。人のこと言えないでしょうに」
　わたしたちは、そんな言いあいをしながら店をでた。外は少し肌寒かった。ふと足元に、くしゃくしゃになった黄緑色の紙が落ちていた。それは、わたしが配った名刺だった。
「ううう」
　あまりの悔しさに涙がこぼれた。あんなに頑張って考えたアドレスだったのに。直人がつけてくれたタマキンというニックネームを踏みにじられた気がして、自分がどんなに馬鹿にされるより腹立たしく思った。タマキンは、わたしと直人を結びつける呪文なんだ。タマキンだけは、タマキンだけは、汚してほしくなかった。

　ぐるるるるるる。そのとき、おなかがなった。わたしは恥ずかしくて、ブヒブヒと言ってごまかしたが、
「腹減ってんのか？」
　とイノシシが言った。聞かれていたようだ。
「バレた？　物足りないわ、あれじゃあ」
「俺もだ。ラーメンでも食ってくか」
　イノシシが、無言のままわたしの涙を指でぬぐった。そして、あっけにとられた私を残して、さっさと中華街に向かって歩き出した。
　なんせ中華街は、夜が早い。わたしたちが到着した九時半過ぎには、もう多くの店が閉店していた。わたしたちは、十二時までやっているという中華料理屋に入り、五目そばともやしそば、水餃子、シュウマイを注文した。
「ねえ、あんた今日来なかったらよかったと思ってるでしょ？」
「なんでだよ？」
「わたしのこと押し付けられたから」
「別に」
「うそ」
「うそなもんか、いやだったらいっしょにラーメンなんか食いにくるか？」
　そりゃそうだと思った。いや、まだ信用ならねえわ。
「俺、お前みたいな女、タイプだぜ」
　えっ？　これって告白ってやつ？　うそ、うそよ、だって、わたしは、ブタの金玉みたいな女よ。
「じゃ、じゃあ聞くけどね、わたしのどこが気に入ったのよ？」
「やわらかそうなとこ」
「あそう。そこまで言うなら、わたしとセックスしてみなさいよ」
「いいぜ」
　イノシシは、いとも簡単にオッケーした。わたしは、虚勢を張ってはみたもののまだヴァージンを捨てる覚悟ができていなかった。
「で、でも今日は無理よ。あ、あの日だから」
「あの日？　あの日ってなんだ？」
「だからあれよ、あれ」
「ああ、どっちの料理ショーの日か？」
「違うってば、そうじゃなくて、生理よ生理！」
　イノシシは、ああ、と言って最後の水餃子を口に運んだ。

　金沢文庫に着いたのは深夜十二時を回っていた。わたしは、環ビュンビュン号に乗って夜道をのろのろと家に向かった。イノシシは、わたしとセックスをしたいと言った。わたしが女として見られたのは初めてのことだったので、うれしくってなんだか体と心が軽くなった気がする。わたしも女なんだぁ、ってひとりで照れちゃったり。目の前を歩いているカップルがとってもうらやましくなって、
「わたしも女よぉ」
　なんてつい大きな声で叫んでしまったら、目の前を歩いていたカップルがこちらを振り返った。
「タマキンじゃねえか、なに叫んでんだよ」
「フンゴッ」
　直人！？　あまりにびっくりして鼻がなってしまった。
「フンゴじゃねえよ、まったく」
「と、隣の子は？」
　直人は、その女の子と目を合わせて優しくほほえむと、彼女だよ、と言った。
「彼女のマミ、そんで、こいつが幼なじみのタマキン」
　直人が交互にわたしと彼女を見やって言ったので、わたしたちは小さくお辞儀した。
「タマキン？」
「そう、ほんとは環っていうんだけどな。俺がつけてやったんだ」
　自慢げに言う直人は、少年のような純真さを表情ににじませていた。
「でもタマキンって金玉のことでしょ？　やっだー」
　マミは、口を押さえて笑った。
　わたしは、とても馬鹿にされたようで手がわなわなと震え、金玉などと彼氏の前で平気で言える女の神経を疑った。まさか…。わたしのなかにある考えが浮かんだ。このふたり、すでにヤッている。マミは、直人の金玉をもてあそんだことがあるのだ。だから、金玉などというはしたない言葉を平気で彼氏の前でも言えるのだ。負けた。完敗。しかもコールドゲームだ。というか、同じ土俵にすら立っていないじゃないか。わたしだけまわしをまいて土俵に立ち、彼女は桟敷席で弁当片手にブタの土俵入りを見て笑い転げている感じではないか。
「そうなの、わたしなんてタマキンでじゅうぶんよ。ブタの金玉みたいなもんよ、ねえ、直人」
「自分でそこまで言うなって」
　直人が苦笑いしている脇で、マミは、もう我慢できないというふうに、突然大声をあげて笑い出した。
「ブタの金玉だって。あはははは、金玉だなんて。あはははは」
　おいおい笑いすぎだよ、という直人の制止も聞かずに、ヒーヒー言っておなかを抱えた。
「おじゃまだからわたし、先に行くね」
　わたしは、何食わぬ顔で自転車をこぎはじめたけれど、いつのまにか涙が頬を渡って顔から弾けとび、深海のような真っ暗な夜に溶けていった。唇をかみしめて嗚咽が漏れるのをこらえた。環ビュンビュン号がギコギコと鳴っている。今夜は、なんだかとても寂しげに鳴っていた。うしろは振り返らない。わたしは、イノシシとセックスすることに、決めた。

　目が覚めると、もう昼の三時だった。携帯電話にイノシシからのメールが届いていた。あのあとマミはどうしたのだろうかと寝ぼけた頭でぼぉっと考えた。マミと直人は、セックスをしたのだろうか。したに違いない。あの女、セックス好きそうな顔してたもの。やだやだ。セックスしか生きがいのない女って。でも、そんなにセックスっていいのかしら？　わたしは、そういえばここ最近、こんなことばかり考えている。セックスって。オナニーって。男って。男性器って。
　わたしは、恐る恐るパンティの中に手を差し込んだ。陰毛が指先に触れて不快な感触が手のひらまで広がる。そして、中指を割れ目の中にすっと滑り込ませた。乳首のような豆が指先にひっかかった。豆？　ああそうか、これがクリトリスだ。わたしは、それをそっと指先で擦ってみた。
「ぐふっ」
　吐息が漏れた。生ぬるい息が唇からあふれた。わたしは、びっくりして手を思わずパンティから抜いた。これかぁ。これが快楽というものか。こりゃはまるわけだ。なんて気持ちいいんだろう。わたしは、今日の夜のイノシシとのセックスが楽しみになってきた。
　部屋の中に充満した性的な空気を入れ替えようと窓を開けた。生ぬるい風といっしょに、アスファルトの焼けた臭いが部屋に立ち込めた。わたしは今日、処女を捨てる。
「昨日と同じ服じゃねえか」
　イノシシがわたしのワンピースを見て言った。
「そうよ、このほうがブタっぽくていいでしょ？」
「まあな、ブタに見え過ぎて生々しいけどな。がははは。でも似合ってるぜ、それ」
「えっ？」
　わたしは、耳を疑った。
「だから、似合ってるな、ワンピース」」
　はっきりとそう言った。うそ…。
「そ、そんなこと言ったって、わ、わたしはだまされないからね。体はあげても、心までは絶対あげないんだから。それに、あんただってまた茶色いＴシャツなんかきちゃってさ、イノシシそのものよ」
　イノシシは、呆れたようにふっと鼻で笑った。
「ブタってイノシシ科だって知ってるか？」
「知ってるわよ！　何年ブタやってると思ってんの」
　けどね、もうすぐわたしはオンナになるの。ただのメスブタじゃなくなるの。
　桜木町の飲み屋街のさらに奥にひっそりと息づくラブホテル街を、イノシシとふたりで歩いた。わたしは、どうも場違いな気がして落ち着かず、おろおろとイノシシのＴシャツの裾をぎゅっと握ってうしろをついて歩いた。ネオンがまぶしかった。まるで、わたしとイノシシの愚行を晒しものにしているかのような錯覚にとらわれた。
「ほんとにセックスするの？」
「当たり前だろ。怖くなったか？」
「馬鹿言ってんじゃないわよ。わたしを誰だと思ってんのさ」
「タマキンブラブラだろ？　なんだあのメアド？」

「タマキン0303だってば！！」
「おまえ、三月三日生まれなのか？」
「そうよ、わたしおひなさまなのぉ」
「ばかじゃねえの、おまえは、ひなじゃなくてヒレだよ、ヒレカツ。それに３ってブタの尻尾みたいじゃねえか」
　ブタブタしっぽしっぽしぽっぽしっぽしっぽっぽー。イノシシが、汽車ぽっぽの歌にのせて陽気に歌いはじめた。わたしは、カッと頭に血が上ってＴシャツをつかんでいた手を離すと、地面を踏み鳴らし勢いよく目の前のラブホテルにはいった。
　部屋は、思っていたより広くて清潔感があった。回転ベッドがあるという噂を聞いたことがあったが、実際にはダブルサイズの四角いベッドがあるだけだった。わたしがガラス張りのお風呂と、カラオケがあることにあっけにとられている間に、イノシシは、いつの間にかパンツ一丁になっていた。
「さてさて、洋服脱いじゃえよ」
「命令しないで。わたしの飼い主でもないくせに」
　飼い主…か。こういう言葉が自然と出てくるところがわたしを自己嫌悪させる。いつだってそうだ、わたしは、やっぱり「ブタ」としての意識を先行させてしまうところがある。悲しい性だと思う。わたしは、ワンピースのファスナーを下ろしながら、おセンチな気持ちになっていた。ワンピースがはらりと落ちた。わたしは、初めて男性の前で裸になった。
　それはまるでミロのビーナスのようだ。貝の上に恥らいながらたたずむ美女。そんな意識で下着姿でたたずむわたしを、イノシシは、せせら笑った。
「おまえさあ、ふつう下着の色くらいそろえてこないか？」
　言われてはっとして下着を見ると、ブラジャーは水色、パンティは黒だった。ああ、そういうことかぁ。
「ブヒッ！」
　わたしは、額をペシッとたたいた。ブラジャーまで気がまわらなかった。いくらわたしのバストに合うかわいらしいブラジャーなどないといっても、せめて色くらいそろえておけばよかった。しかし、いわばそれはデブはおしゃれをする前にやせろ、ということなのだろうかと勘ぐってしまう。それに、そうだとしても反論できない。そりゃそうだと思える。ブラジャーというよりは、小さな子供ふたりが乗れるブランコのように見えなくない。胸を包みこむというよりは、せき止めると言ったほうが的を射ている。
「ほら、ブラジャーもはずせよ」
　イノシシがそう言ったが、わたしは、なかなかそれを外す勇気がなかった。なんどもホックに手をやったが寸でのところで手が止まるのだ。たかがホックを外すというだけの行為が、それでもデブには辛かったりするのだが、このときばかりはさらに困難を極めた作業のように思えた。
　すると、イノシシが私の後ろに周り、ブラジャーのホックに手をかけた。
「ヒィッ」
　背中に当たったイノシシの手の温もりが、背中にじかに伝わり思わず声を出してしまった。し

かし、それは気持ちが悪いという類の感情から発せられた声ではなく、イノシシの唐突な行動に単純に驚いて発せられたものであった。そのあとに紡ぎだされた感情は、むしろ、うれしいとか気恥ずかしいとかいった、心ときめく類の感情であった。それは、けれども同じだけの恐怖心もわたしに抱かせた。
　その瞬間、急に視界がぼやけていった。そして、生温かいものが頬を伝うのを感じた。わたしは、舌を出してそれをぺろりとなめてみた。しょっぱい。そう自覚したとたん、わたしは、肩を揺すってしゃくりあげはじた。
「大丈夫か？」
　イノシシの質問になんと答えてよいかわからずに、わたしは、ぐふぐふっと嗚咽を漏らしながら首を縦にふった。
　イノシシは、わたしを抱いていた手をほどくと、ベッドに座り込んだ。わたしは、おもむろに後ろを振り向いてイノシシの顔を見た。イノシシは、何事もなかったかのようにトランクスの裾から手を差し込んで、股間をボリボリとかいていた。
「ん？」
「だんでもなひぃぃ」
「おまえ、好きな男いるのか？」
　唐突にそう聞かれたので、びっくりして涙が止まった。
「おい、大丈夫か？　ブタみたいに鼻がヒクヒクしてるぞ」
「ブ、ブヒッ」
　わたしは、声に出して言ってみた。そうか、やはり、わたしは、まだ直人のことが好きなんだ。イノシシとのセックスで忘れようとしていただけなんだ、と鼻くそをほじくるイノシシを見ながら、へんに冷静な心もちになった。
「わたし、直人のことが好きなの。でも、わたしには不釣合いだし、彼女もいるし、どうしようもないの」
「まあな、おまえに釣り合うやつなんてそういないぜ。がはははははっ」
　な、なんて失礼な！　いまさらあんたに言われなくてもわかっているわよ。わかってはいるけれど、面と向かってそう言われるとわたしの中の乙女ちゃんはわずかに傷つくのだ。
「あんたなんかに…」
　そう言いかけた瞬間、
「俺しかいねえよ」
　とイノシシが言った。
　わけがわからずに鼻をヒクヒクさせているわたしに、
「おまえと釣り合うのは、俺しかいねえよ」
　ともう一度言った。
　わたしは、恥ずかしいのとうれしいのと困惑とで慌てふためいた。
「あ、あんたにわたしのなにがわかったって言うのよ。だって、昨日初めて会ったばっかじゃないの」
「一回会えばわかるよ。俺とおまえはお似合いだ」

「だぁかぁらぁ、なんでそんなことが言えんのよっつってんの」
「簡単なことだよ。不細工同士じゃん」
　へ？　不細工同士？　それだけかい？
「ふざけんじゃないわよ、あんたねえ、わたしが不細工だからっておちょくんないでくれる？　不細工にも五分の魂ってことわざがあんのよ」
　けれども、そんな憤るわたしをイノシシはニヤニヤしながら黙って見つめていた。
「あったまきた！　もう帰る」
　わたしは、脱いだ服を急いで着ようと床から拾い上げ、ワンピースに足を通した。背中のファスナーをしめようとしたが、慌てているやら慣れないやらでうまくしまらず、思いっきり引き上げたら、ガジガジッと音がしてファスナーが壊れて動かなくなった。
「う、う、うっ、うえーん、わたしは、普通の女の子みたいにかわいい服着て、おしゃれして、恋愛して…。うううううう、普通にしたいだけなのに」
　そして、その場に崩れ落ちた。素足に触れるじゅうたんの感触が湿っぽくて不快だった。まるで底なし沼にはまっていくように、わたしの体がじゅうたんに沈んでいく。そうだ、わたしは、普通の女の子になりたいだけなのだ。メスブタなんかじゃなくて、人間の女の子なんだってことくらい、ほんとはわかっているわよ。ただ、現実から目をそらしていないと、辛くって生きていられないだけなの。わたしは、唇をかみしめて床をドンドンと握りしめたこぶしで叩いた。
「やめろよ」
　もう一度床を叩こうとしたわたしの腕を、イノシシがつかんだ。わたしは、驚いてイノシシの顔を涙と鼻水でくしゃくしゃになった顔でのぞきこんだ。
「もうやめるんだ」
　イノシシは、子供をあやすように優しく言って、わたしの頭を自分の胸に抱え込んだ。
「俺もいっしょさ」
　イノシシの胸は、とても温かかった。汗ばんだＴシャツがわたしの頬に触れる。それは、不快どころかまるで水打ち際で寝そべった頬に、夏の日差しにあたためられた波が打ち寄せてくるような心地よさを感じさせた。そして、やわらかそうに見えたイノシシの分厚い胸の肉が思ったより硬いことに気がつき、男の人は硬いんだなあと妙に落ち着いた頭で考えていた。
「いっしょ？」
「そう、いっしょ」
　不思議そうにイノシシの顔を見上げた。
「俺だっていまだに女子にはいい扱いされてないぜ。キモいとか、むさ苦しいとか、暑苦しいだとかさ」
　イノシシがもうあきらめてるよといったふうに笑った。
「たまきって言ったよな、おまえ」
　そうよ、わたしがいぶかしんで答えると、
「環、って呼んでいいか？」
　とぶっきらぼうに言った。
　ドクン。心臓が大きく波打った。

「な、なによそれ、彼氏ヅラ？」
　照れを隠すようにそう言った。イノシシの目は、いままでわたしを馬鹿にしてきた人たちとはなにかが違っていた。瞳がとっても黒くてきらきらしていた。濁りがない透きとおるような瞳。けれども、どこか寂しさをたたえた輝きが、その奥に潜んでいる。彼も辛い思いをいっぱいしてきたんだ。わたしは、そう思った。そして、俺もいっしょさ、と言った彼の過去を思い、わたしは、胸を痛めた。
「ごめん。いいよ、環で」
「そっか、よかった」
　イノシシは、少年のように顔をほころばせた。
「俺のことは…」
　そう言いかけたイノシシの言葉をさえぎって、わたしは言った。
「一郎って呼ばせてもらうわ」
「覚えてたの？」
　驚いたようにイノシシが言うので、
「当たり前よ、記憶力だけはいいの」
　とわたしは胸を張った。そして、わたしたちは、声を出して笑い合った。
　わたしたちがホテルを出て時計をみると、まだ九時を回ったばかりであった。夜だというのにまだ蒸し暑く、外に出たとたんわたしの肌は汗ばんだ。一郎も同じように汗ばんでいた。
「デブにはつらい季節だよな」
　一郎が言って、がはがはと笑った。わたしは顔をしかめたが、なにも言い返せなかった。そして、おもむろにハンカチを出した。デブにとって夏は本当に、つらかった。
　わたしは、汗を拭いたハンカチを一郎に差し出した。一郎は、それを手にして、びちょびちょだなとわざとらしく嫌な顔をしてみせた。
「じゃあ返して」
　一郎の手からハンカチをとろうとしたが、一郎は、わたしの手をかわしてそのハンカチで顔を拭いた。
「環の匂いがする」
　ブヒッ。わたしは、ぞっとして一郎から一歩離れた。そして、ぷっとふきだした。
　わたしは、まだ、ヴァージンだった。

一郎と別れて家に帰ると、疲れきった体をベッドに横たえてまぶたを閉じた。汗をかいていて不快この上ないにもかかわらず、シャワーを浴びる元気すらなかった。いつもは直人のことを思い出すのに、今日に限って一郎のことばかりが気になる。一郎に抱擁されたことを思い出しては体の芯が熱くなり、一郎の下卑たあの豪快な笑い声を思い出しては、可笑しくて笑みをこぼしている。え？　もしかしてわたし…一郎に惚れた？　一郎の体を欲しているわけ？　しばらく考えてそんなはずはないとぶるぶると顔を振った。直人のことをあきらめようとしてはいるものの、やっぱり直人は、わたしにとってどこか特別な存在であった。だって、十年以上彼のことを思ってきたんですもの、そりゃ当然だわな。直人、一郎、直人、一郎。恋多き乙女ってか。直人、一郎、直人、一郎…。

チャイムの音でわたしは目を覚ました。いつの間にか眠ってしまっていたようだ。カーテンの隙間からは陽ざしが差し込んでいた。

「タマキーン、いるかぁ？」

直人の声だ。わたしは、飛び起きて部屋のドアを開けて、

「上がって待ってて。すぐ行くから」

と階下にむかって思いっきり叫んだ。

「おじゃましまーす」

そのとき聞こえたマミの声に、朝から、朝といってももう十一時を回っていたが、とても憂鬱になった。わたしは、とりあえずジーパンとＴシャツに着替えて髪を束ねると、重い足どりで階段を下りた。階段がミシミシと音をたてた。足どりが重いからかしら。そんなはずはない、わたしが重いだけだろう。

「お待たせ」

わたしがリビングのドアを開けると、マミは、直人にべったりと寄り添ってあからさまに媚をうっていた。直人は、それをやめさせるでもなく、

「おう、起こして悪かったな」

とさわやかに笑った。

「ケーキ買ってきたの。環ちゃんのもあるからいっしょに食べようと思って」

ケーキの箱には「馬車道十番館」と書かれてあった。

「うわぁありがとう」

わたしは、警戒心も忘れてケーキに夢中になった。

「ここのケーキ食べてみたかったんだぁ」

満面の笑みでそう言ったわたしを見て、マミは、くすっと笑って顔を隠すようにうつむいた。え？　なに？　わたしったら、はしたないことしちゃったぁ？　やっだー、もうなんでこんなに食い意地がはってるのかしら。わたしがそんなことを考えながら、えへへと恥ずかしそうに頭をかくと、直人は、相変わらず甘いものには目がないんだな、と呆れたように笑った。

「女の子はみんなそうよ、ね？」

マミは、わたしに同意を求めるように言ったが、わたしに向けられたまなざしには明らかに嘲笑が含まれていた。ケーキごときに食らいつく馬鹿な女。だから太るのよ、と言っているかのようだ。

「わたし、紅茶でもいれてくるわ」
　部屋を出てキッチンに立ったわたしは、ティポットに紅茶葉をいれお湯を注ぐと、わなわなと怒りに震える手でカップに紅茶を注いだ。あの女、いったいなんのつもりかしら。わたしに恥をかかせたいわけ？　でもどうして？　なぜかはわからないが、わたしは、マミがわたしを陥れようとしている気がしてならなかった。ああん、もう、腹が立つ。わたしは思いついて、ひとつのカップの紅茶の中につばを吐いた。これをマミに飲ませてやる。
くくくくっ。肩をゆすって声を殺して笑った。
「お待たぁ」
　つとめて明るい声で言いながらわたしがリビングに戻ると、上機嫌だねえ、なんて言いながら直人がはしゃいでいる。ごめんよ、直人。あんたの彼女にわたしの唾液飲ませちゃうけど許してね。でも、マミがいけないんだからね。なんて自分を正当化しながら紅茶をのせたお盆をテーブルの上に置いた。
　すると、直人が気を利かせてカップを配りはじめたではないか！
「あっ！」
　わたしが制するより先にカップはそれぞれの前に並べられた。わたしの唾液が入ったカップは、直人の前にあった。
「どうかしたか？」
「な、なんでもない」
　直人がカップを手にした。そして、それを口に運んだ。わたしは、固唾を飲んでその瞬間を見守った。ゴクリ。直人が紅茶を飲んだ瞬間、
「ブ、ブヒッー」
　と言ってしまったものだから、さあ大変。直人が驚いて紅茶をぶわーっと一気に吐いた。そして、その紅茶がわたしに浴びせかけられた。
「おい、タマキン、笑わせんなよ。大丈夫か？」
　わたしは、慌ててテーブルの上に置いてあったタオルを手にしてそれを拭いた。しかし、よくみるとそれは布巾だったので、マミは、もう我慢できないといった具合に大声を出して笑いはじめた。ケーキも台無しだった。自業自得だわ。わたしは、罰が当たったのだと思った。これだから悪いことはできないのだ。
　わたしが着替えてかえってくると、わたしの席の前にケーキが置いてあった。
「環ちゃんが食べて」
　マミが言った。
「いいよ、マミちゃん食べなよ」
「いいの、うち近所だからいつでも食べられるし」
「そ、そう？　じゃあいただこうかしら」
　マミちゃんていい子じゃないの。わたしの勘違いだったのかしら。そんなことを頭の隅で考えながらケーキをほおばっていると、
「ねえ、環ちゃん」

　とマミがなにかを企んでいる目でわたしを見つめた。
「昨日見ちゃったんだぁ」
　マミは、ふふふと笑ってわたしと直人を交互に見やった。一郎のことだ。わたしは、とっさにそう悟った。
「マ、マミちゃん、ななななな、なに、なにを見たの？」
　まずい。焦っている。うまく言葉が出てこない。
「言ってもいいのかなあ？」
　マミは、あはは、と小さく笑って紅茶を一口すすった。そして、もったいぶった様子でわたしと直人の顔を再び交互に見た。
「早く言えよ、気になるじゃん」
　直人がマミの横っ腹をつっついた。マミは、やん、とかわいい声を出して体をくねらせ、直人の指をつかんだ。
「昨日ね、環ちゃんが…」
「あああ、ちょちょちょっと待って」
「なんだよ、タマキン、隠し事かよ。俺たち幼なじみだろ？」
　わたしは、困り果てて無理やり笑顔を作った。
「マミ、言っちゃえよ。いいから」
「昨日ね、バイトに行こうとしてたの。そしたらぁ、野毛のラブホテルから環ちゃんと男が出てくるのみたんだ」
「ち、違うの！　セックスはしてないの。セックスは。ほんとよ、セックスはしてないの！」
　必死だった。そんなに否定しなくてもよかったようなものだが、そのときは必死だった。
「おいおい、そんなにセックスセックスって連呼すんなよ。一応女だろ、おまえ」
「そうだよ、そんなこと女の子が言っちゃだめじゃーん、あはは」
　マミは、してやったりといった表情でわたしを嘲笑っている。
「そうかぁ、タマキンもオンナになったか」
　直人は、まるで娘の成人を祝う父親のような口調で言って、うんうんとうなずいた。
「だから、やってないの！」
　わたしが否定すると、ふたりは顔を見合わせて困ったように笑った。
「わかったからそう興奮すんなよ、な。誰だってやってることだし」
　直人がそう言ってマミに目配せすると、マミは、やだぁこっち見ないでよ、と甘ったるい声で直人に媚びた。
「わ、わたし用があるから」
　わたしは、うつむいたまま悔し涙をこらえて唇をかみしめた。わたしはあなたたちのピエロじゃないのよ！　そう叫びたかった。
「じゃあ帰るか、マミ」
　直人は立ち上がり、トイレ借りるぞと言ってわたしとマミをリビングに残して部屋を出ていった。
「言っちゃまずかったぁ？」

　上目遣いでマミが言った。
「直人の前であんなこと言うことないでしょ？」
　怒りを抑えてわたしが反論すると、
「あれ？　なにムキになってるわけ？　もしかして直人のこと好きなんじゃないの？」
　とわたしを挑発しはじめた。わたしは、なにも言い返せずにただ震えるこぶしを堅く握りしめた。
「無理よ。あきらめなさいよ。直人、わたしのことしか見てないわよ」
　涙がこぼれた。どうしてこんな理不尽な目にあうのだろうか。それも自分ばかり。太っていて醜いってことがそんなに罪なことなの？　わたしにだって心があるってこと、どうしてみんなわかってくれないの？
「ま、あんたにはあのイノシシみたいな男がお似合いよ」
　マミが鼻でふんと笑ったとき、
「マミ、行くぞ」
　とドアの向こうで直人の声がした。はーい、待って待って。
「じゃあね、環ちゃん」
　マミが急に声色を変えてほほえんだ。わたしは、なにも答え返さずふたりが出ていくのを黙って待っていた。じゃあなという直人の声が聞こえた後、バタンと玄関のドアの閉まる音がした。わたしは、その場にしゃがみこんでおいおいと泣いた。直人にとって単なる友達でしかないという、わかりきっていた事実をあらためて突きつけられたことが辛かった。そして、同じ女性であるマミによって、女としての尊厳までも傷つけられたようでとても悔しかった。
　わたしは、自分の顔を鏡で見てやろうと思った。自分がいまどれだけ無様で醜い顔をしているのか確かめてみたかったのだ。洗面台の前に立つと、それはそれはひどい顔だった。普段から腫れぼったい目はさらに腫れ、涙と鼻水が垂れ流しになってポタポタとあごをつたって下に落ちている。こりゃ年頃の女の子としちゃまずいわ。これじゃ馬鹿にされて当たり前だわな。わたしは、自分に言いきかせるように何度も繰り返し、無理に笑おうとした。へっ、へへっ、えへへへっ。わたしはブタだ、醜いブタだ。
「ブヒーッ！　ブヒブヒーッ！」
　大声でいなないた。そして、よしっと気合を入れて顔を洗った。
　二階の部屋に戻り、ベッドの上に置きっぱなしにしていた携帯電話を見ると充電がきれていた。充電器に差し込み電源を入れると、ピロリロチロリンとかわいらしい音がなり、それに続いてメールが一件届けられた。なんてことはない、昨日は楽しかったなというだけの一郎からのメールだった。わたしが「今日も会えない？」と返信すると、一分も経たないうちに一郎から返信がきた。あいつも暇なんだなあと思うと、なんだか可笑しくなった。メールには、「オッケー」とだけ書いてあった。

　最近夜の外出が多いわね、と意外そうに言うママの前を無言で通り過ぎた。ママは、とてもうれしそうに微笑んでいた。
「コンドームもったの？」
　とママが耳打ちした。わたしがギョッとした顔でママを見ると、気色が悪いほどの笑顔でわたしのズボンのポケットになにかをねじ込んだ。ママから逃げるように外に出てポケットの中を確認すると、ギザギザに縁どられた正方形のパッケージが入っていた。ふーん、これがコンドームというやつね。なんだか柔らかいわね。わたしは、それを何度かつまんだり突っついたりした後にまたポケットにしまい、少し興奮ぎみにビュンビュン号に乗って駅に向かった。生ぬるい風が頬を舐めるように吹き抜け、汗がじわじわと噴き出すのがわかりとても不快だった。すでにＴシャツの脇と背中は汗で湿っていた。
　駅のホームで電車を待っていると、向かいのホームに電車が着いてその電車が発車したあとのホームに直人がいることに気がついた。横浜方面から横須賀に向かう電車だったので、デートでもして帰ってきたのだろうと思った。直人は、一瞬こちらを見たようにもみえたがそのまま階段を上っていった。わたしは、気がつかれなかったことに安堵した反面、少しだけ寂しくもあった。おう、タマキーン、と手を振ってくれることをどこかで期待していたのだ。
　そのとき、待っていたホームに電車がはいってきた。と、誰かがわたしの肩をとんとんと叩いた。振り返ると、直人が、よっ、とほほえんだ。
「デートか？」
　なんと答えようかと考えているうちに発車を知らせる音楽が鳴りはじめたので、なにも答えずに電車に飛び乗り、べーと舌を突きだした。その瞬間、扉が閉まった。直人の愉快そうに笑いをこらえている顔を見て、わたしは、自分の中でなにかが終わったのだと感じずにはいられなかった。直人の姿がだんだんと遠のいていく。さようなら、直人。わたしは、そっと手すりに寄りかかり、車窓を流れていく街灯に照らされたそれほど都会でもない町並みを、ただ眺めていた。
　上大岡駅で快特から普通電車に乗り換え、日の出町駅で降りた。待ち合わせのドンキホーテの前に行くと、すでに一郎が待っていた。
　一郎はわたしの姿を見つけると、こちらに向かって歩きだした。そして、すれ違いざまにわたしを一瞥し、なにも言わずに通り過ぎた。
「ちょっとあんた、なに無視してんのよ！」
　とわたしが背中に向かって叫ぶと、立ち止まってゆっくり振り向き、わたしを手招きした。そして、追いついたわたしの頭を、悪い、悪い、となでた。
「どこ行くのよ？」
「ホテル」
「バカっじゃないの」
　わたしが吐き捨てるように言うと、違うの、と不思議そうな顔をした。
「違うわよ、飲みたいの、今日はとことん飲みたいの。あんた、わたしがどれだけ飢えてると思ってるのよ。発情期のネコみたいに思わないでちょうだい」
「あ、そうなの？　てっきりまたヴァージン喪失って息巻いてんのかと思ったぜ。がははは」
　わたしが蔑むような目でにらみつけると、

「まあ飲むか、な、飲もうぜ」
　とわたしの背中をバシバシと叩いた。
「あとな、発情期のネコじゃなくてブタな。がははは」
　一郎のバカ。でも、その笑い声にわたしは救われた。
　わたしたちは、座敷童子という小汚い居酒屋に入った。ここのレバーがうまいんだよ、と一郎に連れてこられたのだ。
「なんで今日は飲みたいんだ？」
　わたしは、今日一日の出来事を話した。マミという性悪女にホテルから出てくるところを見られたこと、その女にひどい仕打ちをされたこと。そして、大好きだった男に別れを告げたこと。
「で、俺になにをしてほしいわけ？」
「なにをって…。話を聞いてほしいだけ」
「話を？　それだけ？」
「そう、それだけ？」
「なんで俺なの？」
　わたしは、しばらくなにも答えずに一郎を見つめた。
「あんたなら、あ、あんたならわかってくれるかと思ったから」
　一郎は、なにも答えずにわたしの顔をさぐるような目で眺めていたが、にっと白い歯を見せてうれしそうに笑った。案外かわいい顔してるじゃない。と口にしそうになったが言葉にするのはやめておいた。こいつは調子に乗りやすいのだ。
　わたしたちは、これまでのお互いのいたたまれない過去について語り合った。わたしが金玉と呼ばれていたと言うと、俺はビッチローと呼ばれていたと言う。わたしが下駄箱にゴミをつっこまれていたと言うと、俺はシューズにマヨネーズを入れられていたと言う。教科書が破られていたと言うと、リコーダーが花瓶につっこまれていたと言う。そんな具合。わたしたちは、自慢をしている錯覚に陥っていつまでもそんな話で盛り上がった。
「ねえさあ」
「あん？」
「わたしたちってさあ、ものすごく悲惨な人生送ってきたんじゃない？」
「うっ…」
「いま気づいちゃった。あー、だめ、気づいちゃったら萎えるわぁ」
「まあな」
　一郎は、たいしたことではないといったようにウイッとしゃっくりをした。
「まあいいじゃん、不遇の時代を経て我々は出会ったのであります。がははは」
　酔っ払っている。確実に目がすわっている。だめだこりゃ、なんて呆れているわたしもだいぶお酒が回っている。
「ほら飲めよお」
　一郎が芋焼酎をわたしのグラスに注ぐ。わたしは、もう飲めなーい、とかなんとか言いながらグラスを差しだしだしている。見ると机の上には、いつの間にか空になった焼酎のボトルが二本

置いてあるではないか。ということは、これは三本目？　ん、四本目？　うぎゃあ、もうわからないしどうでもよい。顔が熱い、体中の毛穴から汗が噴き出ているのがわかる。
「ラストオーダーになりますが」
　店員の声で時計を見ると、深夜十二時を過ぎていた。
「で、電車がなくなっちゃう。そろそろ行かなきゃ。うえっぷ」
　一郎はへらへらと笑い、わたしの言葉を意に返さない。ほら行くよ、と立ち上がったが、足がふらついてしりもちをついてしまった。どすーんと大きな音がして、ほかの客たちがわたしのほうを一斉に見た。そのとき、急に勢いよく立ち上がった一郎が、キンタマヤマァ寄りきりぃと行司の真似をしたものだから、どっと笑いが起こった。わたしもなんだか可笑しくなって、ごっつあんでーす、と声を張り上げた。すると、よっ、金玉山！　と声が上がり、店内がまたどっと沸いた。
　ご祝儀だ、俺のおごりだ、と威勢よく言った初対面のオヤジにどもどもぉと頭を下げつつ、おふたりさん、お似合いだねえ、これからセックスかい、などという野次を浴びながら居酒屋座敷童子を出た。
「よし行くか」
「どこへよ？」
「ホテル」
　そう言って千鳥足で歩き出した一郎の後ろを、はいともいいえとも答えずに黙ってついて歩いた。ヤッてもいいかなあ、今日こそ処女をあげちゃおうかなあ、きゃ、処女膜破れちゃうわけ？　やっだー、わたしったら、処女膜とか言っちゃってるぅ。ぐふ、ぐふふ。ブヒッ。いや、でも待てよ、またマミに見られないとも限らない。野毛はまずい、野毛はまずいわ。
　急に立ち止まった一郎の背中にどんっとぶつかった。
「わたし、やっぱり今日は帰る」
「ここまできてなに言ってんだよ。俺、昨日も我慢したんだぞ」
「だって、またマミに見られたらやだもん」
　いいじゃんよぉと言いながら、一郎がわたしの手を強く引いた。
「やだってば！」
　わたしが思いっきり突き飛ばすと、一郎はおっという小さな声をだしてよろけて、そのまま後ろに倒れた。
　ゴチンッ。一郎が植え込みのブロックに頭をぶつけた鈍い音がした。
「大丈夫、一郎？」
　一郎は、返事をしなかった。
「一郎？　ねえ、一郎？」
　ふと植え込みを見ると、一郎の後頭部が切れたためだと思われる血がべとりとついていた。
「ひ、ひっ、ひえっ」
　じりじりと数歩あとずさりして、あとは一目散にその場から立ち去った。一気に酔いはさめて、心臓がばくばくと音を立てて耳の裏側で鳴っているかのような感覚が、さらにわたしを震え上がらせた。人を殺してしまったかも知れない。どうしよう、どうしよう。だけど、正当防衛よ、

これは。ホテルに連れ込まれてレイプされそうになったんだもの。あちゃあ、居酒屋であんなに注目を浴びたのはかなりまずいんじゃないの？　相撲取りみたいな女なんてそういやしないもの。足がガタガタと震えてうまく走れなかった。何度もつまずきそうになりながら大きな通りに出ると、ちょうど通ったタクシーをつかまえて飛び乗った。ばふんと車体が沈んだ気がした。
「金沢文庫まで」
　ぶっきらぼうにそう言って、顔を見られないように顔を伏せた。
「ブヒ、ブヒ、ブヒッ、ブヒ」
「お客さん、どうしました？」
「どうってなにがよ？」
「なにかおっしゃいませんでした？」
「なんにも言ってないわよ」
　そうっすか、と運転手は首をかしげた。
「ブヒ、ブヒ、ブヒ、ブッ、ブヒ」
「ブヒって聞こえるんすけど」
　はっ！　無意識のうちにブヒブヒ言っていたんだわ！　やばい、またわたしの特徴を印象づけてしまったわ！
「と、東北出身だからちょっとなまってんだぁ、おら。暑いって言ってたんだけどね、あづいになっちまうだ。あづいあづいってね。ブヒに聞こえたけ？　笑わないでけろ」
　とっさに東北出身のふりをした。知っている限りのなまりを駆使したつもりだ。
「ああ、そうなんすね、そうっすよね、ブヒなんて言わないっすよね」
　うふふふおおほほ。だまされてやんの。こいつが馬鹿でよかったわ。少しの安堵をおぼえたが、窓の外のネオンを眺めていると一郎のことを思い出した。一郎は死んだのだろうか。ただ気を失っただけではなかろうか。でも、あんなに血を流していたら出血多量で死んでしまうんじゃないか。誰かに見られてはいないか。ホテル街だということもあり人気はなかったはずだ。でも万が一見られていたら。
　わたしは、震え上がった。なにかに追われているような恐怖感に苛まれた。そして、少しだけおしっこをちびってしまった。すると、すかさず運転手がくんくんと鼻を鳴らして、おもむろに窓を開けた。ええぇぇ、おしっこ臭いの？　うそ、うそよ、だってちびったって言ってもほんのちょっとだけよ、パンティがちょっと湿るくらいの量よ。
「すいません、お客さん」
　わたしは、ビクンとした。車内でおしっこするのはやめてもらえますか、なんて言われたら、わたしもう恥ずかしくて生きていかれないわ。やだやだ、きゃー。
「な、なによ」
「おならしちゃいました。すいませんっす、ちょっと臭いますよね？」
「あ、おならね。大丈夫よ、臭わないわ。おおお、お、お、おならくらい誰でもするもの。わたしだってほら」
　ブーッ。げっ、冗談でやったつもりなのにほんとにでちゃったじゃないの。
「ぶ、ぶぅー、」

と口にしてごまかしてみたけれど、運転手は、いぶかしそうにバックミラー越しにわたしを見ている。自分だっておならをしたくせに。自分のことを棚にあげやがって、チクショー。
なんてごたごたしているうちに、わたしたちは金沢文庫の駅前に着いた。わたしは、お釣りはいらないから、とせかせかと車を降りその場を立ち去った。
家までの道をとろとろと歩きながら、一郎のことに思いをはせた。一郎は、本当に死んでしまったのだろうか。心配になって携帯電話を取りだした。しかし、誰からも連絡はきていなかった。一郎の携帯電話に電話をかけてみたが、呼び出し音がむなしく響くだけだった。
人なんてそんな簡単には死にはしないわ。そう心の中で繰り返し唱えながらも、わたしは、一郎のことが心配でならなかった。どうしてあそこでその場から逃げるようなまねをしてしまったのだろう。一郎が頭から血を流して倒れているというのに。わたしは一郎を見捨てた。そんなつもりじゃなかったにしろ、それは同じことだ。わたしのことをはじめてひとりの女としてみてくれた人なのに。わたしは、見殺しにした。そして、本当に殺してしまったかも知れない。一郎を助けなきゃ。
そう思った瞬間、道路に飛び出していた。正面から走ってきたタクシーが急ブレーキをかけて止まった。
「野毛までお願いします！」
わたしの表情があまりに切羽詰まっていたのか、運転手は、そのただならぬ気配を察知して、
「お客さん、しっかりつかまっていてくださいよ」
とバックミラーごしにわたしに目配せした。わたしは、その運転手の真剣な眼差しをしっかりと受け止め、こくりとうなずき返した。いまから行くからね、待ってなさいよ、一郎。
「お客さん、あれですか？」
運転手が緊張した面持ちで恐る恐る口を開いた。
「そう。あれよ」
「あれってことは、サツがらみですかい？」
「もちのろんよ」
「いやぁ、これは大変なことに巻き込まれちまったみたいだぜ。こうなりゃ乗りかかった船だ、もっととばしますよ、いいですかい？」
わたしは、運転席の背もたれにしがみつき、まばたきも忘れるほど真剣に、目の前に広がる、わたしを乗せた車に切り裂かれていく暗闇を睨みつづけていた。
「お客さん」
わたしははっとして、
「なに？　わたしなら大丈夫よ」
とガッツポーズをきめた。
「いやね、そんなにしがみつかれるとシートが後ろにひっぱられちゃって運転しづらくて」
「あ、ああ、そういうことね、悪いわね。でも、おじさんがつかまれって言ったんじゃないの」
「まあそう言われちゃあそうですけどね。ものには限度ってもんが」
「わたしがデブだって言いたいわけね？」
「そこまでは言ってないじゃないですか」

「ええ、ええ、そうですとも、わたしはブタですよ。けどね…」
　しばしの沈黙が空気を凍らせる。
「わたしはブタの女王、クイーン環よ！　ブヒーッ！」
　わたしが大きくいななくと、運転手は、ひぃぃと震え上がりつづいてへへぇと頭を下げた。
「お見それしやした、クイーン環さまぁぁ」
　そして、アクセル全開で車を走らせた。
　そのとき、世界がわたしにひれ伏した。わたしには、もう怖いものなど、ない。

ホテル街の入口でタクシーを飛び降りた。恩にきるわ。ひとことだけそう言って一万円札を渡した。
「気をつけるんだぜ」
背後から運転手の叫ぶ声が聞こえたが、わたしは、後ろは振り向かずに手だけを天に突き上げてその声に応えた。
わたしは、つい一時間ほど前に一郎と歩いたを思い出しながらホテル街を歩いた。すると、パトカーのサイレンと人々が騒ぐ声が聞こえてくるではないか。
「一郎！」
わたしは、そうひとりごちて思いっきり走り出した。角をひとつ曲がり、ふたつ曲がり、その喧騒が近づくに連れて、涙が出そうになる。一郎のあの笑顔も笑い声も、もう永遠に失ってしまうのだろうかと考えると、とても寂しくなったのだ。一郎の厚い胸板に抱きしめられたときの感触がよみがえる。おまえと釣り合うのは、俺しかいねえよ。一郎が言った言葉を思い出した。あんたがいなくなったら、わたしは誰とも釣り合わなくなっちゃうじゃないよ。一郎、お願い、死なないで！
「殺人だってよぉ」
人ごみから抜けてきたオヤジたちとすれ違いざまに、話し声が聞こえてきた。わたしは、もう涙でぐちゃぐちゃになりながら、十メートルほど前にできている人だかりに猛然と突っ込んだ。
「どいて、どいて、一郎、イチロウ、うううう」
必死で人だかりをかき分けて警察の張ったテープをくぐろうとしたが、警察三人がかりで押さえられた。
「やめて、離して、一郎、死んじゃやだぁぁぁ」
「おい、うるさいぞ、静かにしないか！　おまえの知り合いか？」
「わたしが殺したんですぅぅぅぅぅ」
わたしがそう言うと、警察官は、顔を見合わせて首をかしげた。
「なに言っとるんだ、犯人はあの女だ」
「へ？」
警察の指差すほうを見ると、真っ白でミニのワンピースにサンダル姿のマミが、警察官に手を両脇に抱えられてパトカーに乗り込むところだった。
「マミちゃん？」
わたしが名を呼ぶと、あのかわいらしいマミからは想像ができないほど、下品で獣のような光を目に宿した女が振り向いた。そして、片方の口角をもちあげて不気味に笑い前に向き直ると、もう二度とこちらに振り向かなかった。
路上に放置されている血みどろのナイフが、ちらりと見えた。その血は、一郎が植え込みのブロック塀に頭を打ちつけて流していた血の色と同じようにどす黒かった。
「被害者はどうしたんですか？」
「おまえ、犯人の知り合いか？」
「ち、ちちちち、ち、ちがいます。と、とと、と、友達に似てたけど、ひ、人違いでした」
すると、あからさまに落胆した表情を浮かべて、もう死んじまてたったよ、と面倒くさそうに

答えると、ハエでも追い払うかのようにあっちへ行けと手を振った。
　刺されたのは一郎なのだろうか。しかし、マミが一郎と知り合いとは思えない。第一、どうしてマミがホテル街にいたのだろうか。またわたしをつけてきたのだろうか。一郎じゃないとしたら、刺された男はいったい誰なのか。もしかして直人じゃないか。いや、直人は金沢文庫の駅で電車を降りて家に帰ったはずだ。野毛でいたとは考えられない。
　わたしは、思い立ったように一郎に電話をかけてみた。電話のコールが何秒かつづき留守番電話センターにつながった。心配で仕様がなかったが、電話がつながらないいじょうわたしにはどうすることもできなかった。直人、そうだ、直人にもかけてみよう。わたしが直人の家に電話をかけると、直人のお母さんが電話にでて、あら、環ちゃん、こんな時間にどうしたの、と眠そうに言った。
「直人は？　直人いる？」
「もう寝てるわよ。あの子、夜早いじゃない？　知ってるでしょ？」
「そ、そうだったわよね。ありがと、おばさん」
　それを聞いて少し安心したわたしは、力が抜けてその場にへたりこんだ。そこは、帷子川にかかる橋の上だった。川沿いに並んでいる桜の枝葉が夜風に吹かれてさらさらと波打っていた。川面には半円の月が揺れている。川岸に立つラブホテルのネオンもゆらゆらと漂っている。
「一郎…」
　わたしは、無意識に一郎の名を呼んでいた。橋の手すりにつかまって立ち上がると、ズボンについていた土ぼこりをパンパンと払い落とした。川沿いのほの暗い道を歩いて桜木町にでた。目の前には、みなとみらいのコスモワールドにある観覧車のイルミネーションが、七色に輝いては無限に広がる宇宙の中の小さな銀河系を連想させた。そして、向かいのホテルの照明のおちた客室の暗い窓にもその光が反射し、一帯はいくつもの惑星が夜空に瞬いているようでとても幻想的だった。ああそうか、だからコスモワールドなのか。わたしは、宝物を見つけた子供のようにうれしくなり、その小さな発見を誰かに聞いてほしいと胸をワクワクさせた。
―コスモワールドってどうしてコスモワールドなのか知ってる？　わたし、わかっちゃったよ。今度教えてあげるね。
　わたしは、観覧車の写真を撮って添付したメールを、一郎に送った。そして、そう思うより先に、光に誘われるように観覧車に向かって歩き出していた。ただきれいだと思った。そして、わたしもきれいになりたい、と厚かましい願望を抱いてしまった。見たくれはもう無理だ。それは自分でもわかっている。せめて、せめて心だけでもきれいにならなくては。わたしが勝負できるのはそこしかない。だから、まずなにより、一郎に会って謝りたい。一郎をヴァージンを捨てるための道具のように扱っていたわたしの非礼を謝りたい。そのうえ、怪我まで負わせてしまったのだから、一郎は許してくれないかもしれない。きっと許してくれないだろう。けれど、それでもいい。心の底から謝って、わたしの気持ちを伝えよう。わたしは一郎が好きだ、と。
　もう一度、あの腕に抱きしめられたい。わたしは、切にそう願いながらコスモワールドの鉄柵によりかかって、観覧車を真下から眺めていた。行き交う車の音や風の音に混じって一郎のあの笑い声が聞こえてくる気がして、所在のつかめない一郎を思い、歯がゆさにこぶしを握りしめた

。
　一郎ともう一度会えたら、いっしょに観覧車に乗ろう。一郎が許してくれたら。一郎が、許して、くれたら。一郎が…。許して、許してぇぇ。
「ビービー泣いてんじゃねえよ、うるせえぞ」
　わたしは、その声に驚いて後ろを振り向いた。
「一郎！」
「おまえ、黒いＴシャツは着ちゃだめだって。汗が乾いて白く潮が吹いてんぞ。がははは」
　わたしは、思いっきり抱きついた。生きててくれてありがとう。
「なんだよ、暑苦しいじゃねえか。離れろよ。俺たちデブなんだからさあ」
「やだ、絶対離れない」
「ほら汗ばんできただろ」
　一郎は、口ではそう言いながらも、わたしの背中に手を回した。そして、わたしを強く抱きしめた。
「頭すっげー痛かったぞ」
「あっ…ごめん、ほんとにごめんなさい」
「八針縫った」
「お願い許して。そんなつもりなかったの」
「だめだ、許さない」
「そ、そうだよね。ひどいことしちゃったもんね」
　わたしは、一郎の目を見ることができなかった。一郎がどんな表情でしゃべっているのかを見るのが怖かった。
「そうだなあ、じゃあ八針縫ったから八回キスしてもらおうかな」
「えっ？」
　びっくりして一郎を見上げると、一郎は、屈託ない笑みを浮かべていた。一郎の目には、観覧車のイルミネーションが映りこんで、赤に青に緑にと色を変えていった。
　ほら、と一郎がくちびるを突きだしたので、わたしは、ぷっと吹きだしてしまった。けれど、そんな一郎がとってもいとおしくて、彼のくちびるに自分のそれをそっとあてがった。生まれて初めてのキスだった。ぎこちないに違いない。わたしは、恥ずかしくてぱっとくちびるを離した。
「一回」
　一郎が言った。わたしは、恐る恐る二回目のキスをした。
「二回」
　三回、四回、五回。一郎は、キスをするたびに声に出して数えた。くちびるを合わせている時間が、回数を重ねるたびに長くなっていった。六回目のキスで、一郎がわたしのくちびるをぺろりと舐めた。びっくりしたけれど悪いものではなかった。七回目のキスでは、一郎がわたしの歯と歯茎を舐めた。思わずうっと声が漏れたが、一郎は、意に介さずわたしの歯茎を舐めつづけた。八回目。最後のキスだ。わたしは、なんだかもっともっとキスをしたいと思っていた。それなのに一郎ったらすぐにくちびるを離そうとしたから、わたしは、一郎の顔を両手で挟んで自分の

舌を押し入れた。すると、一郎の舌が待っていましたとばかりにわたしのそれに絡みつき、わたしは、戸惑いながらも同じように舌を絡ませた。キスってこんなに気持ちがいいものだったんだ。わたしは、舌がとろけていくのではないかというくらい、キスに夢中になっていた。
「痛てててて」
　一郎の叫び声で現実に呼び戻された。勢いあまって手が一郎の傷口に触れてしまったらしい。
「あっ、ごめーん」
「ったくもう、おまえ、ほんと馬鹿力だな。でも、おまえの処女膜が破れるときもこれくらい痛いのかも知んないから、おあいこってことで許してやるよ。がははは」
　このバカ、ムードぶち壊しだわよ。まったく。なんて幻滅しながらも、一郎とまたこうやってじゃれ合える幸せをかみしめて笑みがこぼれた。幸せ？　わたしが？　わたしは、信じられなかった。幸せだと感じる瞬間が、わたしの人生において訪れるなんて。
「わたし、怖い…」
「オメーが怖ぇよ」
「だからそうじゃなくって、幸せすぎて怖いっつってんの」
「環の場合は、太りすぎて病気のほうが怖いと思うけどな。がははは」
「あったまきた！　その傷悪化させてやる。ってあんたどこで処置してもらったの？」
「あそこ」
　一郎が振り向いて駅のほうを指さした。
「桜木町駅のむこうに救急センターがあるんだ。そこまで自分で歩いてった」
　たくましいわ。わたしの迷いは消えた。わたしは、一郎を欲していた。心も体も。もう、断る理由は、なにも、ない。

朝目覚めると、胸になにか重いものを感じた。ふと見ると、それは、一郎の腕だった。わたしは、その手をどけるとテレビをつけた。すると、朝のワイドショウで昨日のマミの事件を取り上げていた。殺されたのは五十代の男で、キャバクラ嬢のマミをホテルに無理やり連れ込もうとして、マミの持っていた護身用ナイフで刺されたということだった。それだけを聞くとマミがかわいそうにも思えるが、その裏では、お金ほしさにマミが客を相手に売春をしていたという事実も、あわせて供述しているという。一番かわいそうなのは直人だ。マミにだまされていたうえに、なにかしらの事情聴取も受けているかも知れない。直人にやれと言われた、なんて狂言をマミが言っている可能性だってある。

携帯電話をバッグから取り出して、直人に電話をかけようと折りたたみ式携帯電話をぱかっと開くと、待ち受け画面に昨日撮ったコスモワールドの観覧車が映しだされた。いつの間にこんな設定をしたのだろう。首をかしげながら、いびきをかいて眠っている一郎に目をやった。一郎は、傷ついた後頭部をかばうように、うつ伏せで寝ていた。枕にはよだれがいっぱい垂れて、枕元には封を切られたコンドームのパッケージがころがっていた。乱れてしわくちゃになったシーツは、昨日の夜のことが現実だったことをわたしに再確認させ、なんだか照れくさくなった。

相変わらず馬鹿面してるわね。その穏やかな寝顔を見ていると、なんだか笑いがこみ上げた。けれど、その馬鹿面もこれからはわたしだけのものだ。わたしは、携帯電話のカメラでそんな一郎の寝顔を撮って画像を保存すると、そっと、携帯電話を閉じた。